

円地文子『女坂』論 — 生命力の発露 —

田中 愛

一

『女坂』は、昭和二十四年から八年の長きにわたり断続的に雑誌掲載され、三十二年に一括して出版されるに及び「野間文芸賞」を受賞、以後円地文子の代表作として認められるようになった作品である。

「すべてを犠牲にして家という倫理に殉じ、真実の愛を知ることのなかった女の一生の悲劇と怨念を描く」（新潮文庫裏表紙）といった見方をされてきた『女坂』であるが、それは、妻妾同居や夫と嫁の不倫の関係などに苦しみながら忍従の一生を送った倫が、臨終間近に放った言葉の重さによるところが大きい。

私が死んでも決してお葬式なんぞ出して下さいますな。死骸を品川の沖へ持って行って、海へざんぶり捨てて下されば沢山でございます。

この最期の言葉は、「復讐」^(注1)「一生涯の恨みのこもった怨念の叫び」^(注2)などと見られ、作品を規定してきた。

円地のこの時期の作品には、女性を抑圧し虐げながら省みることのない男たちと、それに向ける女性の情念のすさまじさが描かれるものが多く、注目を集めるようになっていた。しかし一方、執念や怨恨の苦しみからの脱却、さらには宗教的ともいえる救いが暗示される系列の作品もある。『花方』（昭和十七年）『夫婦』（昭和十八年、のち『いのち』と

改題)『ひもじい月日』(昭和二十八年)『白蛇物語』(昭和二十九年、のち『花光物語』と改題)などがあげられよう。『女坂』は、最期の言葉の重さとその瞬間まで感情を抑えこんだ倫のストイシズムにおいて、この系列の作品とは異なる。しかし、倫が倫理的に生きようとし、やがて浄土真宗の信仰に近づいていくさまが描かれており、憎悪や怨恨を抱きながらそこに埋没しきらない精神の存在が認められる点で類似している。竹西寛子氏は円地の文学について

女の「業」や「執念」「怨念」をただ正当化しようとする安易な同性援護の文学ではない。女の暗黒に執着する一方で、その暗黒を照らす光にも、ありふれぬ怖れと憧れでつながっている。^(注3)としており、一般化した円地評価とは異なる、いわば宗教的倫理的側面を指摘している。

『花方』発表の数年前から、円地は浄土真宗の信者であり、仏教学者であった高楠順次郎のもとを訪ねている。高楠は、円地の実父上田万年の東大勤務時代の親しい元同僚であり、仏教における女子教育を考え武蔵野女子学院を創立し、その構内に居を構えていた。

父が死んで(万年は昭和十二年没―筆者注)一、二年したところに、私は高楠先生をお訪ねするようになった。三代の半ばにさしかかったところで、生活に悩みが多く、自分の力で処理しかねる時期であった。(略)それから二、三年間時々高楠先生をお訪ねして、いろいろなことをうかがった。(先生と呼ぶ名の故人 高楠順次郎)『灯を恋う』結婚生活の不如意などさまざまな苦悩を抱えていた円地は、その救いの糸口を宗教に求めたいという思いがあったのであろう。円地は数年間、高楠のもとに通って仏教についての話などを聞いたようである。この経験が『花方』など先の系列の作品を生むベースとなったのかもしれない。^(注4)

円地が『女坂』を構想し、資料を調べはじめたのは昭和十四、五年ごろであった^(注5)という。これはちょうど高楠を訪ねていた時期と重なっている。『女坂』の執筆経緯などを半分小説仕立てで書いたともいえる『半世紀』に、高楠は「笠

置博士」として登場しており、円地と目される宗子は「仏伝の説話などに取材して小説を作ってみてはどうか」と言われ、何冊かの本を借りたこともあったという。浄土三部経のひとつ『観無量寿経』にあるイダイケ夫人の話が『女坂』に取り込まれていることから、その影響はうかがえる。倫のモデルである円地の外祖母村上琴が、忍従の底から光を求め、浄土真宗の信仰に進んだ心のあり方を、円地は探っていたのかもしれない。

しかし、臨終間近の倫の言葉は、最期に執着や怨念を離れたいいくつかの作品のような救済を思わせるものではない。「女の暗黒」に沈倫することなく「暗黒を照らす光」を求めた倫の人生の軌跡をたどり、最期に放った言葉の意味を考察してみたい。

二

照りのいい黄味がかった顔色の額が少々ひろく、厚肉の形のよい鼻を中心に眼も口もゆっくり間隔をとって置かれているので、神経質な印象はどこにもなかったが、はれた眼蓋の下におされたように細く見ひらかれている眼には、ちょうどその眼蓋を蔽いにしていろいろな表情の流出を食いとめているような一種のもどかしさがあった。

夫の依頼で妾を探すべく、馴染みのきんのもとを訪れた倫の姿である。その手伝いを頼む倫の顔には「女面のようなほのかな笑いが漂」うとされ、倫の落ち着いた外面の下にはさまざまな感情が封じられていることが示される。実際に倫は「胸の中に噴上げて来る感情を力一杯おさえつけおさえていた」のであり「良人が外の女のものになるということ、公然と認めなければならぬ辛さ」に身を焼いていたのである。「肉体の底から湧き出す本能の動きで自分を自然に動かして行かれぬ肌の女」が倫であった。

その夫白川行友は、誰よりもその「厚い表皮の下には熱い血が油火のように強く燃えている」ことを知っていた。倫

の情感の激しさを「中九州の照りつける容赦のない夏の陽を連想させた」「自分の強気の一枚上をゆく強さ」などとす
る行友は、それを「けぶたくなじめない」と感じていた。行友にとって倫はすでに「愛情の対象」ではなく、正妻
として「家の為に倫の立場を重くみている」だけなのである。大書記官として十分な地位と財力を手に入れている行友
は、倫に「一切委せる」形で妾を家に入れることを決めたのであった。

行友はそれまでも女性関係が盛んで、上官の川島県令にも「白川君もああ遊ぶんじゃ妾を一人二人うちに置く方が所
帯のためによからう」と言わしめるほど好色であった。しかし「良人を天として仕えることを自分の生活の信条にし」
さらに「無情な良人を愛していた」倫は「夫と家とを大切に思う道徳できびしく自分を縛って、誰からも非をうたれな
いように油断なく家事に心をつかって暮らしていた」。夫の数ある女性関係に悩みつつ、「一ぱいの愛情と知恵」を「夫を
中心とした白川家の生活につめこみ、家を守っていたのである。しかし、夫婦の齟齬はすでに明らかである。

身分や財産のある男が妾を持つのは、当時それほど不自然なことではなかった。^(注6) きんが倫の話を聞いて「男は出世す
れば妾の一人や二人持つのは不思議でもなんでもなかった。かえって家の盛って行くあらわれのようである。奥さんも嫉妬半
分、少しは得意も交っているだろう」と思っていることからもそれはうかがえる。しかし、倫には夫に対して、それで
納得も懐柔もしえない強い感情と執着があった。

倫はどんな犠牲によってでも、自分というものの内心の欲望や情緒を底の底まで良人に解って貰い度いのだった。
それは倫としてはどうしても白川以外に解くことの出来ない情願なのである。

倫の愛情は、その強さの分だけ、激しい嫉妬や恨みとなって倫を苦しめる。四谷怪談の芝居を見ながら、「無慚にう
らぎられた怨恨がやがて異形な悪霊と変化して行くお岩を自分に当てはめることは何と容易で実感に満ちているであら
う」と思わずにはいられない。眠れぬ夜に夫と須賀のいる新座敷を見る自分を「鎌首を上げて夫と須賀を見つめている

「一疋の蛇」のように感じるのであった。

行友が憚ることなく妾須賀を寵愛し、妻である倫の気持ちに顧慮する気配もない生活の中で、倫はやがて

十数年にわたる自分の献身と熾烈な情熱を便利な下僕の忠誠ぐらいにしか受取らない心驕った放逸な夫をどうして尊んだり愛したりすることが出来よう。この夫は自分の愛の対象ではなくこの生活も虚偽な醜いものである。

と、夫や夫に服従することを美德とする封建道徳への不信を明らかに感じるようになる。「封建時代の女性道徳に従って、これまで夫のためにも家のためにも犠牲をいとわない貞女を自分の典型に置いて一筋に真直ぐに生きて来た」倫であったが、無批判に信奉してきた「既成の道徳」ではなく、自覚的な生を生きる自分なりの「人生に対する倫理」を支えとするようになるのである。

行友の愛を受け、性の対象として、また身の回りの世話をする者として、須賀は家内での妻の役割を果たす。とすれば、倫が白川家に存在価値をもって生きるためには、妻でありながら、実質は家を整え財産を管理する「支配人」となることであった。白川家の中で生きることが、もはや信じることのできない夫や家に献身するという逆説の中に身をおくことである。しかし、諦めの中に唯々として生きることが、烈しい内面を持つ倫にはできなかった。己を抑圧するもののために「あらゆる知恵と精力を費や」すという皮肉な闘いを、倫は選んだのであった。「肉体の絆の切れた夫が妻に対してどこまで理不尽を通せるものか、倫は一言も争わぬまま全身の力で凝とうけとめ」夫を見据えながら、かつては夫への愛ゆえに力を尽くしていた家政の切りまわしを、「冷厳な意志」によって行うのである。

この闘いの中で倫を支えたのは、実は「正妻」であるという矜持だったのではないか。夫の愛情を失い、また跡を継ぐにふさわしい長男をあげられなかった（長男道雅は「他人と親しむことの全く出来ない片輪な性質」であった）倫であれば、白川家の中で生きるためにも「正妻」であることにいっそう固執せざるをえなかっただろう。

倫は「維新前の家の掟では、妻妾の別は越えがたい階級をなしていた」ことを思い、それをやすやすと越える風潮を憂う。「妻の位置は蔓草のようにはかないもの」となったがゆえに、妾選びの際「自分の家の中へ闖入して来る女性に對して、倫は殆ど無意識の中に、鮮明な強い性格を嫌」う、すなわち妾が正妻である自分の地位を脅やかすような強気な女であることを警戒するのである。また「もし万一須賀に子供でも出来ることがあったらどうであろうとあらためて倫は慄然とする」が、正妻である自分の子供が正当な白川家の後継者であるべきはずが、妾の産んだ子供に取って代わられることを怖れたのだろう。

もともと細川藩の、下級とはいえ武士の家に生れ、白川のもとへ「客ぶん」として迎えられた倫であれば、倫理的な性格として須賀に罪悪感や同情・憐れみがあっても、身代のまわった「竹の皮屋の娘」に夫の寵を奪われることに、傷つけられる思いがあったのではないか。士族の出である第二の妾由美には、須賀に對するような屈託した思いが語られることはない。

その後も、「養女という名の女が事実上妾だというのは戸籍を穢していること」としたり、須賀を「奥さん」と呼ぶ書生紺野に「須賀のことを奥さんというのは止めて下さい。このうちで奥さんは私一人なのですから」とぴしゃりと申し渡すなど、正妻としての自分の位置を意識し続けていることがわかる。

「正妻」であることを恃みとすることは、己を抑圧する封建道徳と手を結ぶことでもある。それが矛盾であり保身であることを、倫は意識する余裕もなかったにちがいない。「甘い涙の味など忘れ果てた日常」の中で、「暗いひもじい思」いかかえつつ、毎日を「真剣勝負のような気魄」で生きるしかなかったのである。

倫の実母は心を痛め「あみだ様の御せい願を一途に信じ、朝夕南無あみだ仏を忘れず、何ごとも如来さまにお委せ申べく候」と手紙を送る。しかし倫は「神さまとか仏さまとかいう人間の世界を見透している尊いものがあるなら、自分

のように一生懸命に真実に生きようとして努めているものにもっと明るい道をひらいて下さってもよさそうなもの」と思うのであった。母から示された救いの道は、自分の倫理に執着する倫には「ひどく子供だましに嘘らしく感じられるものであった。

しかし、「行友の放埒な行状を蔽って家の基礎をぐらつかせまいといつも気の休まらない努力をつづけている苦勞」はありつつ、己を封じて家のために尽くす倫は、白川家にとってなくてはならぬ存在となり、その位置もほぼ揺るがぬものになる。倫の愛する孫の鷹夫（道雅の長男）が正嫡におかれることも決められ、この点でもひとまず安心していられる。このまま時が経てば、歳をとっていく夫のエロスが衰え、放逸な振る舞いも納まり、財産管理等によって白川家の地盤を支えている倫の重要性はさらに高まるはずであった。

三

しかし、行友は息子の嫁美夜にまで手をつける。「息子の嫁という越えてならぬ筈の関を行友は平気で踏み破」ったのだ。「倫はまだ行友の中に自分と同じ道徳が保たれていることを信じていた愚かさには愕然と」する。そして、「嫉妬とほまるで性質のちがってしまった煮えるような憤り」を感じるのであった。行友はそうした倫理の埒外に生きる、「手に負えぬ」存在だったのである。

さらに、倫が心配したのは「道雅がもしこのことに気づいたらどんなおそろしいことが捲き起るだろう」ということだった。それは「道雅がこのことに気づいて白痴性をつのらせ兇暴になるようなことがあれば、これまで自分が胸一つに畳んで持ちこたえて来た白川家の体面はめっちゃめっちゃに崩れてしまうかもしれない」という怖れである。行友の行為は、「家」の倫理を蹂躪し、倫が必死で守って来た砦を内側から崩すものだった。

「倫理」及び「家」の秩序を生活の軸にしてきた倫にとって、それをともに踏みにじる行友の行為はあまりに理不尽で不合理なものであった。自分を抑えて夫に仕え、家人に気を配り、家を整えていく懸命な日々がやがては報いられることを、倫は漠然と期待していたにちがいない。しかし、事態はさらに困難になっていく。倫の母が遺した「人間のこ」というものはどうあせっても、思い通りに行くものじゃなか。お前さんも、そこをようのみこんでな、何ごとも無理せんように、阿弥陀さまにお委せする心を忘れてはなりませんぞ」という言葉は、娘の烈しい性格を知るがゆえであったのかもしれない。これを契機に、母に幾度も勧められながら受け入れられなかった浄土真宗の教えに、倫は熱心に近づいていくことになる。

倫が浄土真宗西本願寺で聞いたイダイケ夫人の説話は、『観無量寿経』に表されている。王である実の父を殺そうとする、残酷な息子の行為を止めることができず、その苦しみに救いを求めたイダイケ夫人が仏陀に願い、その導きによって絢爛たる浄土や弥陀三尊の姿を見ることができ大悟するという内容である。

王妃として「人間の占める位と富に於いて殆ど欠けることはない」身分でありながら「阿鼻叫喚の暗黒無辺世界」に陥り、「仏よ、仏よ、この無力な生命に力を与えてください、どうしてこのような醜い片輪な人間の世界に生きつづける努力をしなければならぬのでしょうか」と呻吟するイダイケは、白川家という地位も財産もある家の正夫人でありながら、「愛欲の泥沼田」に引き込まれて苦しむ倫と重なる。

しかし、『女坂』で示されるイダイケ夫人の説話には、原典と比較すると微妙に異なる点が見出せる。その差異に、倫の意識を反映させて見ることができらるだろう。

『観無量寿経』は、中国においてはもともと極楽浄土に往生するための観想を中心に説いたものにとらえられていた。しかし、善導大師が、付け足し的な部分とされ軽んじられていた最後の部分に主題を見出し、弥陀仏の本願からすれば

観想さえできない罪惡の凡夫でも、念仏によって往生できると説いた。法然は「ひとえに善導一師による」としてその教えを受け継ぎ、「弥陀の請願」と「念仏」は浄土宗・浄土真宗の柱となった。

善導の解釈によると、イダイケ夫人は己の罪深さに気付かず「汚辱と惡に満ちたこの世に居ることをわたくしは願ひませぬ。この汚濁と惡の世界には地獄・餓鬼・畜生が満ち満ち、悪人たちが多いのです」（中村元訳 岩波文庫）としてこの世を厭い、浄土に往生するために善人の行う観想法ばかりを願っていたが、仏陀はイダイケにその無力さや罪惡の凡婦であることを自覚させ、他力念仏の教えに導き入れたという。

しかし『女坂』の記述においては、イダイケ夫人について「わが胎から生れた子の余りに自分の心と似ていない不思議」「夫人自身聡明な慈悲深い心の持主であるに拘らず」など、原典にないイダイケの正しさ慈悲深さが強調されている。さらに、息子に牢につながれてからも教えを求め、心の安寧を得ていた父王ビンバシヤラは、『女坂』の記述では卑小化され、「病み衰え」た姿として表される。そして、イダイケ夫人は「夫の業による惡の魂を身内に宿してその鬼の子に苦しめられる」となっている。

すなわち『女坂』では、イダイケ夫人の聡明さ、慈悲深さにもかかわらず、夫の惡業ゆえの残酷な子供が生れ、その因縁因果によって自分ではどうしても乗り越え得ない苦しみを味わうことになったという形になっている。これは、行友と倫の長男道雅の異常性について「あんまり旦那様が女を騙すから、男の子に報いたんだって」とささやかれる言葉を思わせ、「道理」と「愛情」といった人生に対する倫理を信条として生きながら、その夫の惡業を引き受けて苦しむ倫の姿と重なるのである。

さらに、原典ではイダイケ夫人は汚濁の世を厭い、そこから逃れたいと願っているのに対し、『女坂』では「仏よ、仏よ、この無力な生命に力を与えてください」と、この苛酷な現実を生き抜く生命力を欲している。イダイケと倫を重

ねてとらえることができるなら、倫はどのような宿世でも生き抜かねばならないということを前提にしており、己の命が困難を乗り越える力を得ることを望んでいたといえるだろう。そこに、仏教的諦観に収束しない、倫の生命に対する強い執着をうかがうことができる。浄土真宗は「不幸な現実を耐え抜く熱源を補給する性格をもっていた」というが、倫は信仰を己の内に入れることによって、さらに従来の生活の形を貫いていくのである。

しかし倫が「自分の考え得る理念ではどうしても解決出来ないこと」、「自分の頑ななまでに守って来た人生に対する倫理よりも強いひき切れないもの」のあることを自覚し、その前に人は無力であると実感したことは、倫に人生を問い直させる新たな発見を促すことになる。

倫は雪の降り始めた夕暮れの坂道を、すでに病に侵されている体を支えつつ、一步一步登っている。夕餉の支度を始めた家々の灯りや魚を焼く匂いは、倫の心を揺さぶる。

幸福が：調和のある小さい、可愛らしい幸福が必ずこの家々の狭い部屋の燭光の弱い電灯のもとにあるように倫には思われた。小さな幸福、つましい調和：結局人間が力限り根限り、呼び、狂い、泣きわめいて求めるものはこれ以上の何ものであるか。(略) あらゆる精力と知恵を費やしつくして来た言わば人工的な生き方の空しさを倫はふと淋しい片側町の家の灯の中に見たのであった。

倫の感じた幸福は「小さい、可愛らしい」ものとされる。その対極として倫が思い描いたのは、地位や財産を誇る白川家であつたらう。その内実は不倫にまみれ、愛の通わぬ「非情な固い取りつき端のない壁に囲まれた世界」である。そこでは「倫を不死身のように信じて気にかけているものは一人もな」い。真の「幸福」とは何かを考えるとき、「家」とらわれていた己の生き方の空虚さを、孤独な倫は初めて思うのである。

あらゆる精力や知恵を注いで来たにもかかわらず、自分に満足感も豊かな潤いも与えることのなかった「家」という

ものの虚偽を自覚しつつ、それでも「自分の生きた力のすべて」の証と言える己の人生を否定することは、倫にはできなかった。

私の生きて来たすべては空しい甲斐のないものだったのだろうか。いやいやそうではないと倫は強く首を振る。
(略) 必ずトンネルを突きぬけたあのような明るい世界が待っている…待っていなければ理にあわないのだ…

「理にあわない」という言葉からは、倫がやはり今までの生き方に固執していることがうかがえる。それでは、倫のいう「明るい世界」とは何か。正しいものが勝つということではなかったか。その対象は、現実においては圧倒的な強者である行友であろう。行友に勝つとは、倫にとってその命において長らえることだった。「自分の命が行友に勝たねばならない」と倫は思う。

しかし、倫は病に倒れることになる。「やっぱり私は負けましたね。お祖父さまに負けましたよ」という言葉は、人生の背理をすでに倫が覚悟していることを思わせる。それでも倫は、死を前にして、己の生を己のやり方でまっとうしようとする。すなわち、須賀を探してきたときに余ったお金の存在を明らかにし、それを隠してきたことを夫に詫びるのである。遺言状によってそれを行うのは、正妻としてのけじめのつけ方であったからだろう。倫理に生きてきた倫にとって、その隠し金の存在は自分の信条に反することであった。死に臨んで、倫はその負い目を精算し、正妻としての生を完結させようとしたのだ。そして同時にそれは、白川家の正妻の立場、そしてその節を守った生き方から自分を解放する手続きでもあったのではないか。

行友は、正妻として自分の非のみを書いて許しを乞うているこの遺言状に、「精一ぱいの詫び」としての言葉を吐かせられる。そして、行友は倫を「生涯愛し通した妻のように大切に扱」い、「一家親類のものもはじめて倫を正夫人らしく(傍点筆者) 大切に看護した」のである。皮肉にもそれは倫がかつて固執し、すでに捨てたものだった。

臨終も間近に迫ったある日、倫は感情を露骨に表しこう言う。

おじさま（行友のこと）のところへ行ってそう申上げてくださいな。私が死んでも決してお葬式なんぞ出して下さいますな。死骸を品川の沖へ持って行って、海へさんぶり捨てて下されば沢山でございますって……

この言葉によって倫は、今までの人生における扱われ方からすれば、自分にはこのような処遇が妥当であるということを示したのである。最後だけ体裁を取り繕ってみせられることを拒否したのである。しかし、ここに悲壮感はない。この言葉を言う倫の様子は「昂奮に輝いて生々していた」のであり、「『さんぶり』という言葉は倫は調子づいて殆ど快げに言った」という。単なる恨みの表白であれば、このような輝きははずである。これは「妻であることから、母であることから、守り続けた家から、更には自分の『あるべき姿』から解き放たれることを望む叫び^(注8)」でもあったろう。しかしさらに大切なのは、倫が初めて内にこめていた思いを放ったということである。それは同時に、倫が抑え付けてきた生命力が最後に炸裂した一瞬だった。辛苦に満ちた生活で生命力が枯れていくのでもなく、宗教的諦観に溶解するのでもなく、その生命の炎は最期の瞬間までその胸に烈しく燃えていた。そこには夫に対する恨みも執念もあったろうし、自己を「家」から解放するという欲求もあったろう。しかし、そのどれも包摂して、倫が持ち続けてきた生命力があふれたと見てよいのではないか。

四

昭和三十年代に入ると、円地作品に「憑霊的能力」を持つ「巫女的な女性」が登場してくる。古典文学における憑依現象を思わせる、特殊な自己発露の力を持った女性であり、『女面』（昭和三十三年）『なまみこ物語』（昭和三十四年）などに結実している。この女性像の創造によって、円地文学は本格的に開花したといえるだろう。

『女面』の中の「野々宮記」には、『源氏物語』の六条御息所について「現実のいかなる行動にもよらず、憑霊的な能力によって、自分の意志を必ず他に伝え、それを遂行させねばやまぬ霊女」とされており、その能力が円地の「巫女的なもの」の下地になっていると考えられている。小笠原美子氏は「憑霊的能力」は「抑えこまれた自我が生きようとする生命力への激しい希求の現われ」とし、その能力が発揮されるには「『女性の抑制された自我の極限』という前提がどうしても必要である^(注9)」としている。倫の最期の叫びも「四十年來、抑えに抑えて来た」果ての自己表出であった。また、その言葉は姪の豊子によって行友に取り次がれるが、「病人の囁言として話すつもりだったのが、言葉に出すと、倫が乗り移っているように真剣に上ずった声になった」とある。倫が姪に憑依しているかのようなこの描写には、「憑霊的能力」の片鱗をうかがうことができるだろう。まさに倫は、その生命の力において、また極限まで自我を押さえ込んだ末の自己発露を行った点において、「巫女的な女性」の性質を備えている。円地は『女坂』の最後の場面において、「憑霊的能力」を意識していたとみることができであろう^(注10)。

しかし、『女坂』が「純然たる客観小説^(注11)」として高い評価を得ていることからわかるように、円地はそのリアリズムの枠を守った。小説の中でその能力をはっきりと表現するのは、以後の作品に譲られることになる。

戦後、円地文学は女の情念の苛烈さにおいて注目されたが、それは「業」や「執念」と呼ばれ、女の内部にある底知れぬ暗さ、恐ろしさとしてとらえられていた。円地はそれを超越する境地を、宗教性や倫理性の中に模索していたのであろう。しかし、倫の一生を描きつつ、宗教においても倫理においても手なずけられることのなかった女の自我に、確かな価値を認めることができたのではなかったか。すなわち、否定し乗り越えるべきものとしてではなく、生命の力としてそれをとらえたのである。円地文学を特徴づけることになった「巫女的な女性」は、この認識の上に造型されることになる。この意味で『女坂』は、円地文学の新たな展開を生み出す母胎となったといえるのである。

《注》

注1 奥野健男「永遠に怖れられる女性―円地文子の文学」(『文学界』昭和34・8)

注2 前田睦子「円地文子論」(『武庫川国文』第三号 昭和46・2)

注3 「円地文子」(『日本近代文学大事典』講談社 昭和59)

注4 『ひもじい月日』のモチーフは、『碧巖録』の「至道難きにあらず、唯揀択を嫌う、但愛憎無ければ、洞然として明白」という言葉であったと、円地は述べている。(『ひもじい月日』など)『女の秘密』新潮社 昭和34)

注5 「その祖母の生活は大変だったなと思うようになって、それで、書いてみたいなと言う気持ちになって資料を少し調べたのが昭和十四、五年ころなんです」とある。(中村明『作家の文体』筑摩書房 昭和52 昭和51年2月のインタビューの収録)

注6 『女坂』本文に、「夫が自分と二十支違いの辰歳」とあるところから、行友は一八四四年、倫は一八五六年生まれとなる。二人が結婚した当初は、明治三年、一夫多妻制の公認といえる、夫と妾を二親等とした「新綱律領」が発布されるなど、法律にも前代の習慣を反映させていた。しかし、自由民権運動の高揚などを背景に、時代は一夫一婦制の確立に向けて動いていく。明治十八年、すなわち行友が須賀を妾にしたちょうどそのころ、妾を戸籍に家族として登録することが禁止されるといった改革が行われている。そこで行友は須賀や由美を「養女」として戸籍に登録したのであろう。行友の意識は時代と逆行するものであった。ただし、特に上層階級においては妾をもつ風習は残っており、きんのように男の地位や財力の証として抵抗なく受け取る人々もまだ存在していた。

注7 遠藤久美江「円地文子『女坂』の世界」(『北方文芸』vol.9 No.3 昭和51・3)

注8 野口裕子「円地文子『女坂』再論―人間としての生―」(『日本文芸研究』第四十七卷第四号 関西学院大学日本文学会 平成8・3)

注9 小笠原美子「円地文子―人と作品」(『円地文子の世界』創林社 昭和56)

注10 『女坂』の最終章は、『妖』(昭和三十一年)が書かれた時期と重なっている。『妖』は円地が「一つの曲がり角」と認識している作品であり、「巫女的なもの」のよってきたる心の動きが

自分は動かないで棺の中にもいるようなのに：色んなことや色んな人間がとも生き生き動き出して来て困るの：自分の体は年とった猫みたいにぐなりとしているのに、心の働きが自由すぎて気味悪いのと表わされている。円地の中には、この時期「巫女的な女性」の像がすでにあつたにちがいない。

注11 平野謙「解説」(『日本の文学50 円地文子・幸田文』中央公論社 昭和41)

『女坂』の引用は、『円地文子全集』第六卷(新潮社 昭和52)による